

いたという人はほとんどいない。その人たちの話す記事を読んだりしていると、今でも涙がこみあげてくる。

K先輩がもしも中国で健在ならば、七十六、七歳になつていと思う。日本での故郷がどこであるかも聞いていなかつたし、彼も話してはくれなかつた。中国を離れた私と、残つたK先輩、あのときの別々に選んだ決断が、その後のお互いの運命の分かれ道となつてしまつたのだ。今となつてはどうしようもないことだが、「諸行無常」という仏語をしみじみと感じる今日である。

満州で過ごした少年時代

神奈川県 岸 温

昭和八（一九三三）年三月、まだ吹く風の冷たい神戸港から、両親と五人の男の子の計七人の大家族は、連絡船の「うすり丸」に乗船して大連に渡つた。

当時父は、国鉄の仙台鉄道管理局内の塩釜線といわれていた東北本線の支線の終点である利府駅の駅長をしていたが、将来のことを考えて満鉄で働くことを希望して、満州に渡ることになったのだ。従つて、私の出生地は利府駅の駅長官舎ということになる。

最初に赴任した所は、遼陽といわれる都市で、そこで約一年間にわたつて満鉄社員としての必要な教育を受けていた。妹はそこで生まれたが、初めての女の子であつたので、父母は大変な喜びであつたそうだ。

教育が終わつて、さらに現場教育を受けるため奉天（瀋陽）に移り、そこでまた、約一年間生活をした。約二年間の教育が終了して、やっと駅長としての独り歩きができるようになり、奉天から約一時間ぐらい北に行つた、得勝台という駅に駅長として赴任した。そのときには、長男十八歳、次男十六歳、三男十三歳、四男八歳、そして五男の私が五歳で、遼陽で生まれた妹は二歳になつていた。さらにこの駅長官舎で、末っ

子の六男が生まれたので、兄弟七人ということになった。

そのうちに、長兄は陸軍に入隊して近くの駅に駐屯していた鉄道連隊に入隊したが、翌年に自分の小銃で自殺を図った。どんな理由なのか、私は小さかったので知るよしもなかったが、父が守備隊長と懇意にしていたので、守備隊長の計らいで匪賊討伐に出動して戦死したということになり、慰霊祭ももらったと聞いていた。

次兄は、本溪湖^{ホンキョウコ}と呼ばれる、満州でも有数の風光明媚な所にあった工業学校の寮に入っていた。その後、この兄も卒業後は満鉄に就職し、北満の都市、齊々哈^{チチハ}爾^ルにあった鉄道工場に勤務していたが、吉林にあった関東軍の部隊に入隊し、関東軍の精銳部隊の一員として南方戦線に移動し、フィリピンのコレヒドール島に行った。そこから葉書が、一、二度届いたが、それ以後は音信不通となった。私たちが日本内地に引き揚げてから通知があったところによると、フィリピンからニューギニアに部隊移動し、ポートモレスビーという

所で戦死を遂げた。

三番目の兄は、日本内地の大学に入学し勉強をしていたが、卒業と同時に陸軍を志願した。父は、軍刀を購入するためのお金をやりくりして送金していたが、上海の奥地で中国軍と戦っているうちに終戦となり、武装解除されて比較的早く内地に引き揚げていた。このような状況で、七人の兄弟のうち、我が家にいたのは四人になっていた。

父は、得勝台での駅長勤務の後に、今度は北満のトルチハという駅の駅長に転任することになったが、私たちは学校教育のために、母と共に旅順に行くことになった。今でいう単身赴任ということである。私のすぐ上の兄が鉄嶺小学校の六年生で、私が同じ学校の三年生だったときのことである。二人とも、旅順師範付属小学校に転校することが決まった。

旅順は、新市街といわれる旧ロシア人街と、旧市街とに区別されていた。新市街は学校の街だった。旅順工科大学、旅順高等学校、旅順中学校、それに旅順師範付属小学校と、上から下までの多数の学校があっ

た。旧市街には、旅順医学専門学校と小学校が二校あった。旅順中学校には、満鉄沿線からの生徒を受け入れるための寄宿舎である寮が数箇所もあり、設備も完備されていた。旅順高女にも、校内に寮が併設されていた。

私は付属小学校を卒業すると、全く他の小学生と同じように旅順中学へと進んだ。小学校では、五年生のころから木銃を渡されて、「戦争ごっこ」のようなことをさせられていたが、中学生になると戦闘帽をかぶり、足には脚絆を巻き、手には木銃を持った姿で軍事教練が始まったが、まだそのころは食糧事情はよく、何でも豊富にあったので、教練をしていても力が入っていた。しかし三年生ごろになると、食糧事情はがぜん悪くなり配給制となって、腹がへるようになった。おからを毎日、食べさせられたので、教練をしていても腹に力が入らなくなった。それでも、よそと比べれば、旅順は海に面しているので海産物が豊富で、魚介類をたくさん食べられたので、ひもじい思いはまだしなかった。

中学三年生になったときに、学校でツベルクリン反応の検査があり、陽性に転移していたので、教練の間は見学ということになり、ただ立って友達の間を眺めるだけであった。そのうちに学徒動員が行われ、三年生は大連の軍需工場に動員されて、ほとんどの同級生は工場の寮で寝起きをして生産作業に従事するようになったが、私はそのころから右の陰のうがはれだしてきて、旅順病院で診療してもらったら、「手術を要する」との診断を受けて、即刻入院することになった。すぐに手術が行われて、約二時間半ほどの時間が掛かった。腹部に水がたまっていたとかで、ちゃぶちゃぶとスプーンのようなもので、たまっている水をすくっている音が耳に入り、変な気持ちになったものだった。手術後に病室に運ばれたが、驚いたことに二人部屋の病室の隣の寝台には、我が家の近くの一年上の女性が入っていた。私は、七日ぐらいで退院したが、彼女はその後、数カ月もの間入院していたそうだが、病名は知らなかった。後日、聞いた話では、彼女は八月の下旬に旅順に侵入してきたソ連兵に強姦され

たうえに、殺されたとのことだった。それを知り非常に悲しく、またその残酷な行為にりつ然とした。

母は私の術後の養生のためと、小学六年生の妹と、小学一年生の弟の夏休みを兼ねて、父のいる嫩江方面に旅行をしようということを早くから計画していた。

嫩江は中国でも有名な大河で、その名をとって名付けられた満鉄の駅もあった。父はそのころは、トルチハ駅から、嫩江駅に転動していたのだった。そして、この旅行が私たち母子四人の生死をかけた旅になろうとは、神ならぬ身の知る由もなく、運命のいたずらに翻弄されてしまったのである。

出発の朝、我が家の前には予約していた通りの時間にタクシーが来た。妹や弟は、父に会えるということよりも、汽車の旅に出掛けることの方が嬉しいようで、はしゃぎ回っていた。旅順駅から汽車に乗り、まず大連に向かった。そして大連から開原を通って、四平へと順調な汽車の旅を楽しんでいた。

四平駅に着いたころは、もう日はとっぷりと暮れて辺りは真暗になっていた。ここで一度下車をして、駅

前の旅館に泊まった。翌朝早く起き、朝食と昼食の弁当を作ってもらい、再び汽車に乗った。四平から約十時間の汽車の旅で、新京（長春）やハルビンハルビンを通じて内蒙古の齊々哈爾に到着した。やはり昨日と同じように、既に周囲は暗くなっていた。齊々哈爾で一泊。翌日、嫩江に向かって出発した。嫩江駅で懐かしい父に会ったのは、八月六日の夕刻であった。久しぶりに会った父を囲んで、親子五人がつもる話に興じた平和な数日であった。

八月九日、突如、日ソ不可侵条約を二方的に破って、ソ連軍が満ソ国境から全面的に、雪崩を打って侵攻してきた。それを知った私たち四人は、急いで旅順に戻ることにした。嫩江駅を、父に見送られて出発したのは、八月十一日の昼であった。このまま父とはもう会えなくなるのではないかと思つたが、そんなことよりも、一刻も早く旅順に帰ることの方で頭がいっぱいであった。私たちは手を振って別れを告げ、父の姿が見えなくなるまで汽車の窓から身を乗り出して手を振り続けていた。

齊々哈爾駅には、翌朝の六時ごろに到着した。一時間ぐらいホームで待機していて、ハイラル方面からの避難民を乗せた四両編成の汽車に乗ったが、荷物運搬用の貨車だったのにはびっくりした。ほとんどの人々は、疲れきった表情で貨車の床に横になっていた。しゃくりあげて泣いている人、放心状態になっている人、何も言わずに黙り込んでいる人など、様々な人がいた。

私たちが座っていた所に、三キログラムぐらいの黒い子豚を連れ、三歳ぐらいの男の子を抱いた男の人が泣いていたので、母がそっと話し掛けて事情を聞いた。その人の話すことには、「突然にソ連兵が襲ってきたので、驚いて家を飛び出した。私はこの子を背負い、家内は一歳になる女の子をおぶって、家の前約五十メートルぐらいの所にある橋を渡ろうとしたとき、ソ連兵が射撃を始めた。その一弾がおぶっていた女の子の背中を貫き、家内の肺に当たった。家内の最期の言葉は、『早く逃げて！』の一言だけだった。この子豚は、この男の子がかわいがっていて、逃げるときに

もあとを追い掛けてきたので一緒に連れてきた」と、泣きながら語ってくれた。母も私も涙が流れ出てどうしようもなかった。

この難民列車の中で一夜を過ごし、翌日の昼過ぎに、大慶^{タイチ}という駅に着いた。この難民列車は、ここから南下する支線を通って四平に向かうということで、私たちはここで下車して、いつ来るか分からない次の哈爾濱行きの列車を待つこととした。

待つこと約三時間、やっと哈爾濱行きの列車が入ってきた。乗車後、間もなくすると猛烈な雨が降り出したことが、強く印象に残っている。十三、十四の二日間は、この列車の中で過ごした。食べ物、携行していた弁当を食べていた。車窓から見ると線路沿いの周辺は平地で、あまり土地の高低差が無いようで、まるで湖沼のように雨水がたまっていて、線路も水浸しになっていた。大勢の人々が、線路の枕木と枕木の間穴を掘って水を流して、列車の安全運行を図っていた。列車が速度を出し始めたのは、八月十五日の深夜からだった。日本が敗れたということは、まだこの列

車内には伝わっていなかった。

八月十六日の午前零時半ごろに哈爾濱駅に到着した。日本が無条件降伏し、昨日重大放送という事で天皇陛下自らのお言葉があったとのことは、すぐに伝わってきた。明日の命がどうなるのかは分からないと皆覚悟は決めていたが、私たちはどうしても旅順の家までは無事に帰りつきたいと願っていた。

哈爾濱駅から南下する列車に乗れたのは、八月十八日の昼ごろだった。ところが、やっと乗れて、「やれ嬉しや！」と安心したのもつかの間、新京の手前で全員が降ろされてしまった。これから先は、歩くしかないとのことだった。そのとき満鉄の職員から乗客全員に対して、「決して線路沿いには歩かないこと。昨日も新京はここからひと駅だからと言って線路を歩き出した二十一人の人が、全員途中で殺されて丸裸にされた。十分に注意するように！」との注意があった。

新京にやっと無事に着いた。そこからは、無蓋車に乗ったり降りたりしながら、やっと奉天行きの列車に乗ることができたが、それは全く命懸けの行動の連続

だった。十九日の夜に、やっと鉄嶺までたどり着き、そこで下車することにした。鉄嶺は、私が小学校三年生のときまで通学していた街なので、懐かしく安心感があった。ここから奉天までは約一時間であるが、母は疲労困ぱいの状態になっていた。

ここまですれば、奉天には真夜中に着くことになる。ここまでの鉄道沿線でも、随所に「晴天白日旗」が掲げられているのを目の当たりにしていたので、このまま奉天に歩いて行って、真夜中に知人の家を訪ねて市街をさまようことは、危険の上もないと判断したので鉄嶺で下車したが、それでも既に十時を過ぎていた。鉄嶺には、両親が親しくしていた矢野呉服店があったので、そこに直行して門をたたいた。

矢野家で九日ぶりに風呂にも入れてもらったし、布団の上でぐっすりと眠ることもできた。三日間厄介になっていたが、矢野さんから借家が一軒あるので、そこに移ったらどうかという話が母にあったが、私は猛反対した。「明日、鉄嶺から南下する列車をつかまえて奉天に行き、そこからまた南下する列車で行ける所

まで行く。どうしても早く旅順に戻らなければ」と母に話し、母もその通りにすると決めて、明朝鉄嶺を出發することに決意した。

翌日、まだ薄明かりの四時ごろではなかったかと思うが、すぐ上の兄が仲間三人と共に、矢野家の門をたたいた。これにはびっくり仰天した。「地獄で仏」という例えがあるが、まさにそれと同じ気持ちになった。兄たちは、四平からの支線に入った西安という所に、一カ月ほど前に召集されていたのだった。若い学徒出身者ばかりの部隊であったが。ソ連軍と戦うための部隊ではあったが、小銃も全員には渡されないような状態だったとのことで、敗戦となつてすぐに満鉄から貨車を仕立ててもらい、機関士の経験のある人がいて、大連まで脱出しようという話がまとまった。鉄嶺まで来たが、矢野家のことを思い出して立ち寄ったところ、奇遇にも私たち家族と再会したのだった。すぐに私たちもこの貨車に乗せてもらうことになった。奉天から二つ目の、蘇家屯という駅の貨車線に入つたときに、すぐ横の線路にやはり貨物列車が入つてい

たが、この貨物列車には関東軍の軍需物資が満載されていた。食料品から衣料品などの日常生活必需品を積んでいったようだったので、兄たちはその貨車に入り込んで、まず食料品を持ってきた。缶詰と携帯糧食だった。食べ物の確保ができたので、夕暮れになつてそこから出發して南下した。

貨車の中で一泊し、翌日、熊岳城^{ユウガクジヨウ}辺りの駅を通過したときに各車に伝達があつて、「貨車の両側の扉を完全に締めて、声を出さないようにし咳もしないこと、この貨車に人がいることが分かれると全員捕虜にされる」という注意があつた。私は、貨車の換気用の穴からホームの方をのぞくと、十メートルぐらいの間隔でソ連兵が銃を抱えて立っていた。

その日の午後四時ごろに、大連駅の貨物専用ホームに着いた。私たちはこれで助かったと実感が湧いてきた。その夜は、兄たちの母校である大連工業専門学校の際に皆して泊まり、翌日、兄たちに守られて大連からバスに乗り旅順に向かった。大連駅は既に、ソ連軍によつて占拠されていた。

八月二十五日にやっと旅順の家に、無事帰り着くことができたが、八月四日に楽しい夏休みの旅行に出発してから、二十数日ぶりに追い立てられるよう慌ただしく戻ってきた旅だった。そのころは、もう旅順市街にもソ連軍が進駐していた。

生死をかけてやっと戻ってきたが、それから約一週間後に二人のソ連兵が来て、我が家の玄関の扉をたたいた。何事かと思つて扉を開けると、「ダワイ！ダワイ！（出ろ）」と、怒鳴っていた。そしてどこかで強奪してきたのか腕時計を見せて、「ここから一時間後に出ていけ」というようなことを言っていた。私が「二時間にしてほしい」と言うと、ソ連兵は「ハラショウ（よろしい）」と答えた。日ごろから行き来をしていた向かいの家に、急いで衣料品と食料品を運び込んで家を空けたが、日本人は二週間後には旅順市街の全域から追い立てられることとなった。

私はそのころ、以前に手術をした脱腸の傷跡が化膿し始めて、毎日、ヨーチンで消毒してガーゼを当てていたが、ガーゼも絆創膏も品切れとなり、ちり紙と電

気工事用のテープに変わり、傷口は真黒になつてしまつた。

「ダワイ！ダワイ！」と追い出された、我々の住み家を毎日眺めていたが、二週間ほどするとソ連兵は出て行ったようだった。しかし、私はそれに気が付かなかつた。ある日の午後、家を見に行つてがく然とした。家の窓枠は全部外してどこかに持つて行き、家の中は風が吹き抜けていた。二時間の猶子では運びきれずに、家にはいろいろな物を残したままだったが、それらの物は全部無くなつていた。畳までも無かつた。おそらく近所に住んでいる中国人たちが、集団でやつて来て運び出したに違いないと思つた。ただ一つまともに残つていたのは、冷蔵庫だけだった。本やアルバムなどは、床にばらまかれていた。私は思い出の残っている写真だけを拾ひ集めて持つてきた。

旅順から追い出されて大連に向かうことになり、身辺整理をしたが、妹のおひな様は裏庭で焼却した。困つたのは、長兄の骨つぼだった。私たちもこれから先どうなるのか分からないので、持つて歩くこともで

きずに、庭の木の根元に埋めることにした。妹と二人で、「兄さん！許して下さい。ここで静かに眠っていて下さいね。きつとまた戻ってきますから」と言っており、両手を合わせて拜んだ。

大連へ向かった私たち、満鉄社員の家族は、旅順駅から有蓋貨車で、制限された大きさの荷物を持って乗り込み、大連駅に運ばれたが、一般邦人の人たちは馬のひく大車グーチャを大金を払って雇い、大連に向かった。

大連での住居は、満鉄社員の家族はすべて満鉄で手配してくれたが、一般邦人たちは自分たちで住まいを見付けなければならず、大変な苦勞をしていた。私の家族は、母と私、それに妹、弟の計四人だったが、父が保証人になっていた知人の子供で、旅順高等女学校の二年生と一年生の姉妹も引き取って、一緒に行動していたので、総勢六人が家族として割り当てられた八畳一間で暮らすこととなった。

生活を始めた最初の夜、私は便所に行くための階段の上り下りが、苦しくて仕方がなくなった。翌日、一緒に大連に逃れてきた懇意にしている三原家を訪ね

て、四、五キロメートル離れている花園町まで行ったが、その帰り道で再び呼吸困難になった。そのときふと見ると、赤十字のマークが見えた。大連の赤十字病院だった。そこまで行こうと思っても歩くと苦しくなったが、ここで倒れてはならぬと自分で自分を励まして、やっとの思いで病院にたどり着き、内科に駆け込んだ。医師にこれまでの病歴を話したが、医師は聴診器を当てながら、「よくもこれまで生きてこれたなあ！」と言った。すぐに左胸の背中に針を刺して肋膜炎にたまっていた水を抜き、「明日すぐに、満鉄の大連病院に行くように」と指示された。お金を持っていなかったなので、治療費も払わずに戻った。

翌日、母に付き添われて大連病院に行き、そのまま内科の病室に入院させられた。毎日外科に行つて手当てを受けたが、約三週間後に内科から外科の病棟に移されて、外科手術を受けることとなった。

それまでの食事は病院で支給されていたが、食糧品の値上がりで支給が困難となり、入院患者は自給自足をするようになった。病院内の廊下に電熱器を持ち込

んで自炊が始まり、母と兄弟も病院内で寝起きするこ
ととなった。

手術前から化膿していた傷口は、すぐに縫うことが
できずに、二週間ぐらい入院していたが、その間、母
は病室の床にごさを敷いて寝ていた。妹と弟は私の
ベットで寝たが、片側が壁だったので、三人で寝ても
大丈夫だった。

二週間あまり過ぎたところに退院したが、今まで住ん
でいた八畳一間から、父の友人の畠中さんの家に引越
したが、預かっていた姉妹も一緒だった。引越しした
その日の夜半、戸がきしむような物音で目を覚ます
と、自動小銃を持ったソ連兵と日本人らしい男一人
が、中国人の服装をした三人の男と一緒に、家の中を
物色していた。私たちは布団にもぐり込んで息を潜め
ていたが、畠中さんのおばさんが裏口からそとと抜け
出して、交番に走った。強盗の一団が目ぼしい物を略
奪して、退去して十分ぐらいしてから、中国人の警官
二人が駆け付けてきた。

ここは、桃源台といって大連でも立派な家が建ち並

ぶ裕福な家庭の多い地区であったので、強盗も頻繁に
あった。こんな騒ぎが多いと、病み上がりの私は養生
もできないので、三原家にお世話になることとなり、
翌日に早速移った。三原家では、約一週間ぐらい静養
させてもらった。

いつまでもこんな状態では食べていけないので、働
きに出ることとした。たまたま、米の行商をしている
旅順高女の先生が手伝ってほしいということ、大八
車のあと押しをすることとなった。あまり力の要る仕
事ではなかったもので、病み上がりの私にとっては体力
をつけるのに手ごろだった。

それから約一カ月ぐらいたって、今度は母が腹膜炎
を起こして大連病院に入院したが、今度は妹と弟が母
と同じベットで寝起きし、食べることは病人の母が自
分でせざるを得なかった。幸いに大事に至らず、約三
週間で退院した。再び、家族一同が三原家にお世話に
なることとなった。

そのころになると、大連の小、中学校では授業を再
開する所があったが、私たちにはそんな余裕は全く無

く、私は米売りの手伝いをやめて、自分で市場から野菜を仕入れて行商を始めていた。リュックサックに野菜を詰め、更に両手に持ったかごにも入れて、各家を一軒一軒、戸をたたきながら売り歩いていて、子供だと同情して買ってくれるのだが、商品が少なくそれほどのもうけにはならないので、別の商売を探していた。

大連駅前を通り越した所に、日本橋と呼ばれる全長約百メートル、幅約十五、六メートルぐらいの橋があったが、その橋の上に露天商が建ち並ぶので、そこで煙草売りをすることにした。煙草は、危険だから日本人は立ち入ってはならないと言われていた。大連市庁舎の裏に行つて仕入れてきたが、非常に安かった。

その後も危険を冒して、常にそこで仕入れた。売り台も自分で作つたが、よく売れた。日本人相手には、関東軍の「極東」「ゴールドンバット」がよく売れたが、その他にも「ウエストミンスター」とか、「スリーキャッスル」とか、「ミナレット」、細巻きの「老刀牌」「天壇」などが売れた。

日本橋のたもとに、一本の鉄製の電柱があつたが、ある日のこと、日本人の青年が逆さにつるされて、中国人の公安隊によつて殴られていたが、翌朝聞いたら死んだそうだ。

死んだと思つて諦めていた父が生きていて、奉天まで戻つてきた。崑中さんの家に訪ねてきたそうだ。このときは本当に嬉しかった。早速、梅園の一軒家が空いていたので、そこに移り、やっと私たち家族がそろつて住むことができた。

父は下駄売りを始めることになつたが、やはり日本橋のたもとの辺りに店を広げた。一日に二、三足は売れたそうだが、やはりあまりよい商売ではなかつた。ところがある日のこと、リュックサックに下駄を詰め帰る途中で、ちよつとしたすきにリュックサックごと盗まれてしまった。それからは、父に私の煙草売りをしてもらい、私は以前の野菜売りをすることにしたが、行商ではもうけが薄いので露天で売ろうと思ひ仕入れ用の押し車を作ることにして、鉄製の車軸に、両側に約二十センチメートルぐらいの車輪の付いたのを

探した。二本買いたかったがお金がなく、一本しか買えなかった。近所の塀の角柱を引き抜いて車体を作り、一輪車の上に野菜を並べた。仕入には私一人で行ったが、売るときには妹と弟を連れていた。商いの場所は常に決まっていて、場所代を払う必要もなかった。

大連には、様々な露天商があった。「ラーメン屋」「餅子屋」^{ピンズ}「チェンピン屋」などなど。そして野菜売りは十軒ほどで、これはほとんど日本人だった。

だんだんと生活が苦しくなってきた。毎日高粱^{ゴウリヤン}の原穀を買って、それを一升びんに入れて棒で突き、脱穀しておかゆなどにして食べたが、私は下痢を続けていたので、母は私には粟を食べさせてくれた。野菜のくずを丹念に持ち帰って、おかゆに混ぜた。また、電熱器のニクロム線が切れると、それを修理するのが大仕事だった。新品を買えば何でもないのだが、それを買うだけの余裕はなかった。風呂にも、もう何カ月も入っていないので、虱が体中にたかって、取るのが大変な仕事だった。

その後、野菜売りは父に譲って、兄の女友達の紹介で、中国人の洋服屋に朝夕の飯炊きに行くことになった。朝五時に起きて約十分ぐらい電車に乗り、大連廣場で下車した。大連で一番の繁華街にあった洋服屋で、朝食は餅子、夕食もまた同じ餅子にスープだった。彼らも全く粗食だったが、私たち避難民よりは、はるかに恵まれていた。私は毎日、オーバーの中に餅子を一袋しのばせて家に持ち帰り、家族に食べさせた。

昭和二十一年も十一月になると、寒気は一段と厳しさを増してきた。それに反して体の方は一日、一日と衰弱していて、家族全員が栄養失調の症状を呈してきて、このままではとても日本に生きて帰ることは難しいということ、皆が自覚していた。しかし、そのころから日本への引揚げのことが、人々の話題になってきた。

話によると、まず貧困者から順に船に乗せるとのこと、私たちは旅順から追い出されてきた難民で、貧困を極めているので、すぐに帰国者の対象となると考

えて引揚げの申請をした。しかし、許可権を持っていたのは労働組合と称する日本人団体だった。最大権力をもっている組織で、ここの許可によって引揚げが決まるのだった。申請に基づいて我が家にも調査に来たが、行李が二個あったのを見て、「貧困者とは認められない。しかし、これを供出するならば、引揚げの許可を出す」と言っていたので、両親はすぐに同意して行李二個を差し出した。

その後しばらくして引揚げの通知が来て、「一月十七日、指定した場所に集合せよ」と示された。これほど家族一同が喜び合ったことはなかった。指定日に指定場所に集まった。そしてそこから大連港まで、ぞろぞろと長蛇の列を作って歩かされた。

大連港には至る所に銃を持ったソ連兵が立っていて、携行している荷物の検査をしていたが、今回の引揚者は貧困者の集団であるので、持っている目ぼしい物は何もなく、検査は簡単に終わった。

港内に引揚者用の炊事設備があつて、鯖サバのかゆを作するように材料が準備されていて、兄たちは早速に飯炊

きに動員された。でき上がったかゆが配られたが、一年ぶりぐらいに食べる米のかゆだった。これほどにうまいものは、私の生涯においてもあまりないぐらいであった。食事が終わると、ソ連軍の戦車隊がドイツ軍を撃滅するニュース映画を、強制的に見せられた。

しかし、一月十七日には引揚船は大連港に入港しなかった。零下一七、八度に下がった倉庫のコンクリート床で、一晚過ごすこととなった。貧困者集団なので毛布など持っているはずは無く、ごさも無くて直接に床に横になったが、老人や子供には耐えられない寒さだった。十八日になっても引揚船は来なかった。食事は一日二食で十分でなく、皆ひもじい思いをしていた。釜の底にこびりついたおこげを奪い合って食べていた。

翌日の十九日になって、午後二時ごろに、やっと遠くに二隻の貨物船の姿が見えた。皆大騒ぎをして船を見守った。間違いなく引揚船だった。船尾には日の丸の旗が掲げられていた。感激した思いで乗船を待っていた。船には、「英彦丸」と船名が書かれてあった。

排水量一、七〇〇トンの老朽貨物船だった。船内は三段に区切られていて、私たちは下から二段目、船首からも二番目に当たる区画の所に場所をとった。

私は、大連港の岸壁を離れるときから甲板に出ていた。防波堤辺りから涙があふれ出して、複雑な胸中だった。それは物心ついたときから育って今日までになった満州の地を離れて、記憶の片隅にもない日本内地に向かったら、もう再び戻っては来れないだろうというノスタルジアだった。

引揚船には、上甲板の右舷と左舷の外に張り出した急造の便所があったし、船尾には炊事場と赤十字社の詰所があった。冬の日本海の荒れ方はものすごいもので、ほとんどの人は船酔いで食事もできずに、床に転がっていた。そんな状態でせつかくここまで生きてきて、もう少しで夢にまで見ていた日本の土が踏めるというのに、無念にも命を落とす人が次々と出てきた。このことは、引揚げ最大の悲惨事だった。私も数回水葬の場に直面したが、涙が止まらなかった。

一月二十五日だったと思うが、ようやく佐世保港に

入った。港内には発疹チフスの患者が発生したために、約一カ月間も上陸ができずに停泊している引揚船もあった。また、マストだけを海上に突き出している沈船があちこちに見られて、内地での戦争災害の激しかったことがわかれた。私たちの船は、幸いにも何事も無く翌日に上陸したが、初めて見る内地の風景は、緑の樹木が美しかった。

米兵二人によるDDTの消毒で、頭から背中から全体に白い粉を吹き付けられた。国鉄のストライキが予定されていて、引揚専用列車も運行されないのと、とで、収容所に三泊させられた。南風崎駅という、とても小さな駅から東京行きの列車に乗った。上野で乗り継いで仙台に向かい、仙台駅で降りた。駅前に設けられた引揚者用の仮泊施設で一泊し、翌朝市内にある母の妹の家に行き、その家の四畳半一間で、家族六人で当分生活することとなった。

私たちが、佐世保に上陸したときに国からもらったお金は、大人が一人千円、子供は一人五百円だったと思うが、そのほかにも当座の衣類とか毛布などが支給

されたように思う。しかし、これだけではその日から食べていけないので、私も何か働かなければと仕事を探して歩いた。

仙台の苦竹は、旧日本陸軍の施設のあった所で、戦後は米軍のキャンプになっていたが、そこで日雇いの人夫として働くことになった。仕事はキャンプ内の掃除が主だったが、昼になると米兵の捨てた残飯を拾いあさる人が多くいた。その当時は、引揚者だけでなく一般の住民も食べ物に飢えていたのだった。ここでは二週間ぐらい働き、他にもっと収入のある所を探したが、適当な職は見付からなかった。

新学期になったが、私は働かないと生きていけないので、復学することにはあまり関心を持っていなかったが、父や兄は勉強することを強く勧めたので、当時、夜学のあった東北学院中学校という、キリスト教系の中学校の夜間部の二年生に籍をおいた。二年後に新制高校になるというので、同じ東北学院の専門部を受験することとしたが、旧制中学校卒業でないと資格が無いと言われて、私は宮城県庁学務課に行き、旅順

中学校卒業の認可について交渉した。その結果、認められ受験することができて、夜学部に合格した。

昼間は、自分で商売をしたいと考えていたが、我が家に魚を売りに来た人に、魚の行商についていろいろと相談した結果、魚の行商することを決心した。一斗缶を引揚げで使ったりリュックサックに入れて、塩釜の魚市場から仕入れて、仙台市内を行商した。魚に関する知識などは全然無かったので、魚市場の人にいろいろと聞いて歩いた。

「今日はこれが安いから、この魚を売りなさい」と勧められて、それを仕入れて仙台に戻り売り歩いたが、大体、毎朝八時前後だった。家の近くから売りたいと思って、東七番町、東八番町、そして東九番町の順に歩くこととし、東仙台駅で下車したが、ここは東九番町で住宅街だったので、買ってくれそうな家が多く、東八番町から一軒一軒回ったが、買ってくれる家はなかなか無かった。そこで商売をしている家を集中的に訪問したが、そのうちにだんだんとお得意先も増えていった。

東七番町に大きな酒屋があったが、ここのお上さんは必ず買ってくれた。子供だからという同情心もあったのだろうと思う。

イカの季節になるとすぐ売れたので、一日に塩釜を三往復したこともしばしばあった。一軒の家で、どさっと買ってくれるのだった。おかげでかなり儲けたこともあった。

そのうちに、やはり勉強しなければならないと思うようになった。しかし、夜学の同級生は皆同じ境遇にあったので、昼間は働いていた。そのころには、仙台市の中江にあった引揚者用の木造アパートに一家は移っていた。炊事場も便所も共同の約十畳一間に、祖父母も含めて九人で住んでいたが、私は専門部に入學と同時に魚行商を父に譲ることにして、再び米軍キャンプに就職した。

仕事は、陸軍の郵便局でのジャーナターと称される掃除夫だったが、掃除以外にもいろいろと命じられた仕事をしていた。米兵は十人ぐらいいた。郵便局長は将校だったが、全体を取り仕切っていたのは、カール・

ハッスラーという軍曹だった。この軍曹と仲の良いロバート・ミラーの二人は、私の生涯の友人となった。彼らは貧困そのものの私に対して、物質的な援助をいろいろとしてくれた。今は既に二人とも故人となっているが、現在でも米国にいる彼らの親族とは親しくしている。

そのころ兄は仙台市役所に勤めていて、私に市内の中学校の英語教師になることを勧めたので、試験を受けて合格した。しかし身体検査で肺結核と診断され、教師にはなれなかった。病気はしても生活はしなければならぬので、再び苦竹の米軍キャンプの通訳に応募したが、やはり身体検査でひっかかった。幸いに学院時代の同級生が身体検査担当だったので、そのまま合格してもらった。そこで二年間、自動車修理工場の通訳をしていたが、横浜に就職していた友人に誘われて私も横浜に行った。そこで、追浜のキャンプの通訳に応募したが、やはり身体検査でひっかかった。そのころには肺結核もかなり悪化していたので、医者に言われてそのまま夜行列車で仙台に戻り、すぐ

に「抗酸菌研究所」という病院に行き、「迎光園」という療養所に収容されて、療養に専念することになった。

治療は毎週一回、肋膜の間に人工的に空気を入れて肺を圧迫し、結核菌の繁殖を防ぐ気胸という治療方法で、それと同時にバスとヒドラジドと称する薬を毎日服用させられた。約一年半後からはストレプトマイシンという抗生物質の薬を服用した。その後二度レントゲン写真を撮ったが、院長が「もう退院してもよい」とのことと退院し、家で三カ月ほど静養した。

仙台市役所に勤めていた兄が横浜で高売をしていたので、私も再度横浜に行き兄のアパートに転がり込み、そこを根城にして仕事を探していたが、まだ体に自信が無かったので、出版社のアルバイトをして数カ月を過ごした。たまたま英字新聞の求人欄に、通訳の仕事があったのを見付けて早速に応募したが、それは佐渡島の金北山山頂のリーダー基地の自家発電建設現場の通訳だったが、給料が普通の倍ぐらいもらえたので、弟の学費も賄うことができた。そこで二年間勤務

して再び横浜に戻り、新しい家庭を持った。いろいろな仕事を探したが、私にできるのは通訳しかなかったので、横須賀米軍基地の特殊通訳となった。そこで工程管理の役職にも就いて約十年、その後、住友重機械工業株式会社にも勤めた。しかし私のような学歴では上には昇格できずに、五十七歳になったときに人事部から退職の勧告があり、それを機会に、以前から声の掛かっていた日製産業のアトランタの事務所に転職し六年間を過ごして、横浜に引き揚げた。

私は、人間にはそれぞれ定められた運命というのがあるのだということを、つくづく思っている。敗戦後、旧満州で十八万人といわれる日本人が死亡し、関東軍将兵と一般邦人の男性までもが、シベリアに強制労働のために連行されて死亡者が続出したが、生きて再び日本に帰れた人は、やはりその人の持った運命としかいいようがないと思っている。そういう意味で、私も現在こうして命があるということ自体、幸福だと思っている。そして、私に与えられた人生を全うしたいと願うばかりである。